

IMES DISCUSSION PAPER SERIES

第二次世界大戦中の日本における闇価格 の形成について ——ヘドニック・アプローチに基づく推計——

しずめ まさと
鎮目 雅人

Discussion Paper No. 2018-J-17

IMES

INSTITUTE FOR MONETARY AND ECONOMIC STUDIES

BANK OF JAPAN

日本銀行金融研究所

〒103-8660 東京都中央区日本橋本石町 2-1-1

日本銀行金融研究所が刊行している論文等はホームページからダウンロードできます。

<https://www.imes.boj.or.jp>

無断での転載・複製はご遠慮下さい。

備考：日本銀行金融研究所ディスカッション・ペーパー・シリーズは、金融研究所スタッフおよび外部研究者による研究成果をとりまとめたもので、学界、研究機関等、関連する方々から幅広くコメントを頂戴することを意図している。ただし、ディスカッション・ペーパーの内容や意見は、執筆者個人に属し、日本銀行あるいは金融研究所の公式見解を示すものではない。

第二次世界大戦中の日本における闇価格の形成について ——ヘドニック・アプローチに基づく推計——

しずめ まさと*
鎮目 雅人*

要 旨

本稿では、第二次世界大戦中ならびに同戦後の財価格の変動を継続的に捉えるための試みとして、いくつかの財について、既存の戦後闇価格データに接続可能な戦時中の闇価格に関する時系列データを新たに作成する。具体的には、5 品目の財（米、甘藷、馬鈴薯、鶏卵、砂糖）について、価格算出にあたり品質調整を行う手法であるヘドニック・アプローチを用いて、取引当事者の属性や取引場所などの違いが価格に与える影響を調整することにより、できるだけ偏りの少ない闇価格データを推計する。その結果をみると、各財の闇価格は大战中から上昇が加速し、大战末期には四半期ベースの前期比換算で+40%から+80%の高い上昇率を記録したこと、戦時体制に入る前の 1934 年時点の水準との比較では、終戦前後にはすでに 50 倍（甘藷）～800 倍（砂糖）以上にまで上昇しており、戦時中の方が戦後の上昇幅より大きいこと、品目によって上昇時期にばらつきがあり、米や砂糖は大战中、いも類や鶏卵は終戦直後が上昇率のピークであったこと、農村部との比較では、都市部の方が闇価格の水準は概ね高めであったこと、等が分かる。

キーワード：価格形成、闇市場、第二次世界大戦、ヘドニック・アプローチ、経済統制

JEL classification: E31、N15、N45

* 早稲田大学教授・日本銀行金融研究所（E-mail:masato.shizume@waseda.jp）

本稿は、筆者が日本銀行金融研究所個別事務委嘱として行った研究をまとめたものである。本稿の作成に当たっては、金融研究所スタッフから有益なコメントを頂いた。また、闇価格データの入力については、田中美帆氏にご尽力頂いた。ここに記して感謝したい。本稿に示されている意見は、筆者個人に属し、日本銀行の公式見解を示すものではない。また、ありうべき誤りはすべて筆者個人に属する。

1. はじめに

本稿では、第二次世界大戦中ならびに同戦後の価格変動を継続的に捉えるための試みとして、いくつかの財について、既存の戦後闇価格データに接続可能な戦時中の闇価格に関する時系列データを新たに作成する。

第二次世界大戦中から同戦後にかけて、日本の近代史上最悪のインフレーションが発生した。1934～36年平均を1とする東京小売物価指数は1949年には243.4となり、この間に小売物価は200倍以上の上昇を示した¹。これに対して政府は、戦中・戦後を通じて物流・価格統制を実施したがその効果は極めて限定的で、時期が下るにつれて正規の流通ルートである配給品の流通量は決定的に不足し、都市部を中心に国民の多くが闇取引を通じて生活必需品を手に入れるようになったほか、大戦末期には政府自身も公定価格を大幅に上回る価格で物資の調達を行っていた²。

配給品の公定価格を主体とする上記小売物価指数でみると、戦時中より戦後の方が高い上昇率を示しているが、この数字は物価の実勢を表していない。すなわち、1934～36年平均を1とする指数は、1944年が2.098(前年比+12.0%)、1945年が3.084(同+47.0%)であるのに対して、1946年18.9(同6.2倍)、1947年50.99(同2.7倍)、1948年149.6(同2.9倍)となっている。しかしながら、経済取引の多くが闇取引として行われていたことからみて、この数字は需給を反映した物価の実勢を表しておらず、物価の実勢を把握するためには、闇取引における個別の財価格を知ることが不可欠であると考えられる。

闇取引価格のうち戦後については、1945年9月以降の東京における計数が利用可能である。これは、食料品、衣料品、日用品など50品目について、日本銀行が闇取引業者から毎月の店頭取引価格を聴取したものである。1945年9月＝100とする指数および公定価格との比率が公表されているほか、日本銀行アーカイブに各財の単価を記した資料が残されている³。このように、継続的かつ広範な調査が可能となった背景には、終戦直後から東京をはじめとする都市の繁華街に闇取引業者が公然と店を構えるようになり、警察当局の取り締まりも戦時

¹ 日本銀行百年史編纂委員会編(1986)、438頁。なお、日本の近代史上において第二次世界大戦中から同戦後に次ぐ高インフレが発生したのは幕末開港から明治維新前後にかけてであるが、その時のインフレ率は開港前(1854～1856年平均)を1とする指数が1867年に8.0(銀建て)となった程度であり、1桁小さい。新保(1978)、247、282頁。

² 大蔵省昭和財政史編集室編(1956)、355頁、371-377頁、西田(2002)、9-23頁。

³ 時系列の指数は日本銀行統計局(各年版)。原資料は日本銀行統計局「消費財闇及自由物価相場帳(東京)」、日本銀行アーカイブ、検索番号11524。大蔵省財政史室編(1978)によれば、原則として日本銀行員150名の調査票記入報告および指定専門業者約25の店頭価格に基づく報告価格の最頻値を採ることとし、調査時期は毎月15日現在であったとされる。大蔵省財政史室編(1978)、64-65頁。

中に比べると緩やかなものとなったことがある⁴。

これに対して、戦時中の闇取引の実態については不明な点が多い。その背景としては、戦時中の闇取引は戦争遂行という国家目的に反する行為であり、当事者は当局の統制を逃れるかたちで隠れて取引を行っていたため、記録が残りにくく、仮に記録が残されたとしても断片的な情報しか残されていないことが考えられる。現時点で最も整備された戦時中の闇価格に関する統計は、戦後に米国戦略爆撃調査団(USSBS: United States Strategic Bombing Survey)からの求めに応じて日本銀行が提出したとされる財別の消費財闇価格であるが、作成方法は不明である⁵。また、1943年7月から1947年12月まで毎月の農家の資材購入価格を農業統制団体である全国農業会が調査し、1948年に公表した「農村闇物価に関する調査」が存在する。ただし、本調査はその性格上、農村部を対象とするものであり、主に闇物価が形成されていた都市部を対象とするものではない。

本稿の問題関心に最も近いデータとしては、社団法人中央物価統制協力会議（以下、協力会議）が1943年10月から1945年6月にかけて実施した生活必需物資の闇価格調査結果（以下、協力会議調査）がある。協力会議は、1940年に農林省の外郭団体として設立され、主として農林省所管物資の流通、価格等に関する調査、研究を実施し、1946年2月に解散した。協力会議調査は、大戦末期の闇取引の状況を、協力会議が婦人団体等の協力を得て聞き取り調査したものである。必ずしも毎月の計数が揃っているわけではないが、個別の売買取引について、価格と数量、取引当事者（売り手と買い手）の属性、取引の行なわれた場所、公定価格が記されている。本調査の存在は従来から知られていたが、個別取引に関する情報が公開されたのは、1994年であった。これは、1943年から協力会議が解散するまで事務局に勤務していた関成一氏が個人的に所蔵していた調査結果の集計表を統計学・経済史研究者の中村隆英氏に提供し、中村隆英氏と溝口敏行氏が所蔵者の了解を得て翻刻、出版したことによる⁶。調査結果については、森田(1963)がその概要を紹介しているが、戦後の闇価格に接続

⁴ 初田(2011)、83-131頁、石樽・青井(2013)、2629-2630頁、西田(2002)、23-24頁。

⁵ USSBS(1946)の225頁に、1943年12月～1945年11月までの9時点（1943年12月、1944年3月、6月、9月、11月、1945年3月、6月、7月、11月）、42品目について、公定価格と闇価格が掲載されている。なお、森田(1963)は、戦時中の日本銀行において、年間の手形および現金による取引の金額と数量をマクロ的に推計して、その比率をもとに年次ベースの手形取引の金額／数量を「実際卸売物価指数」、現金取引の金額／数量を「実際小売物価指数」として求めたもの（1936年＝100、1936～1944年）を紹介しているが、大胆な前提を置き、貨幣数量説に基づいて概算した数字であり、個別財の価格調査に基づく物価指数とは性格が異なる。

⁶ 協力会議調査の概要については、中村・溝口編(1994)、3頁。

可能なかたちでのデータ整備は行われていない⁷。

原(1995)は、戦時においては食糧問題が特別に重要な意義を持つとしたうえで、諸外国との比較からみた第二次世界大戦下における日本の戦時経済の特徴について、食糧の供給をはじめとする「国民の生活水準を極度に引き下げたこと」を挙げ、日本は「国民生活の犠牲によって 1937 年以降 1945 年までにもおよぶ長期間の戦争を継続」したとしている⁸。また、加瀬(1995)は、食糧統制の実態について数量面を中心に検討を加え、①素材の性質（保存可能かどうか）によって統制の有効性にかなりの差異が生じていたこと、②生産のインセンティブを維持するために生産者の「自家消費」を認めたことが、生産者に自由販売の余地を与えて闇取引を誘発する結果となったこと、③戦争末期に生産量が減少すると、統制組織を通じて都市部に供給される数量は、生産者の「自家消費」（闇取引分を含む）に比べてより急激に減少し、都市部にはほとんど供給されない状況となったこと、などを示した⁹。小池(2018)は、1940 年代の家計消費支出の新たな推計を行い、物価変動を調整した実質ベースでみると、1945 年の個人消費は 1940 年対比で 45%の水準となり、明治初期と同水準まで一時的に低下していたことを示し、物不足とインフレがとくに激しかった都市部では 1940 年対比で 3 割、現物自家消費のある農村部でも同 6～7 割の水準まで低下したと論じている。

最近では、山崎(2011)が、日中戦争から太平洋戦争期を通じた戦時経済下における総動員体制の形成と展開を一次資料に基づいて跡付け、市場経済と計画経済が共存しつつ、対外関係の変化に伴って変質していく姿を示した。また、山崎(2016)は、分析対象時期を太平洋戦争期に絞り、物資動員計画とその実績を丹念に分析することにより、「大東亜共栄圏」と称された日本占領地域全体の生産・物流体制が戦局の悪化につれて崩壊していく姿を克明に描いている。山崎の一連の研究は、鉱工業部門を中心とした生産面と、海上輸送を中心とする流通面に焦点をあてた分析となっている。本稿で導出する消費財の闇価格のデータは、いわばその帰結（ないししわ寄せ）としての生活物資の生産・流通・消費の実態を探るための、基礎データのひとつと位置付けられる。

本稿では、協力会議調査の結果をもとに第二次世界大戦中における個々の財の闇価格を推計し、既存の戦後闇価格の計数と接続することにより戦時中と戦後とを通じた物価動向の分析に利用可能なデータを新規に作成する。その際、価格算出にあたり品質調整を行う手法であるヘドニック・アプローチを用いて、取引当事者の属性や取引場所などの違いが価格に与える影響を調整することに

⁷ 森田(1963)、101-107 頁。

⁸ 原(1995)20 頁。

⁹ 加瀬(1995)283-297 頁。

より、できるだけ偏りの少ないデータの構築を目指す。

本稿では、協力会議調査に闇価格が記載された財のうち統計的な処理が可能なデータ数が得られる 5 品目の財（米、甘藷、馬鈴薯、鶏卵、砂糖）について、闇価格の推計を行う。その結果をみると、各財の闇価格は大战中から上昇が加速し、大战末期には四半期換算で+40%から+80%の高い上昇率を記録したこと、戦時体制に入る前の 1934 年時点の水準との比較では、終戦前後にはすでに 50 倍（甘藷）～800 倍（砂糖）以上にまで上昇しており、戦時中の方が戦後の上昇幅より大きいこと、品目によって上昇時期にばらつきがあり、米や砂糖は大战中、いも類や鶏卵は終戦直後が月間上昇率のピークであったこと、農村部との比較では、都市部の方が闇価格の水準は概ね高めであったこと、等が分かる。

以下、本稿の構成は次のとおりである。第 2 節では、戦時中の財価格の算出にあたりヘドニック・アプローチを用いることの意義について論じる。第 3 節では、使用するデータの詳細と個別の闇価格の推計方法について述べる。第 4 節では、推計結果の概要について述べる。第 5 節では、本稿の推計とあわせて先行研究や同時代の文献資料を参照しつつ、大战中の闇取引の実態について若干の考察を行う。第 6 節は結びである。

2. 戦時中の財価格の算出にあたりヘドニック・アプローチを用いることの意義

ヘドニック・アプローチは、取引されている財やサービスの価格を計測するにあたり、その品質を調整する手法のひとつである。一般に、経済主体が財やサービスを取引する際には、その品質を主観的に評価する。ヘドニック・アプローチでは、取引される財やサービスの価格には、その財やサービスの品質を表す種々の特性（characteristics）に対する取引当事者の評価が反映されていると考える。実証分析にあたっては、観察された価格を被説明変数、品質に影響を与える諸特性を説明変数として、定数項と誤差項を含めた回帰分析を行う¹⁰。

本稿で使用する闇価格のデータは、店頭で公示されたものではなく、個別取引ごとに売り手と買い手が合意した価格である。その際、財の物理的な性質は同一であっても、売り手・買い手の属性、取引の場所等に起因するバイアスが存在する可能性がある。すなわち、小売物価は消費地で消費者が購入する財の価格が基準となるが、例えば、売り手と買い手が顔見知りの関係にある場合や、消費地までの運搬費用・摘発リスクを含まない生産地での取引については、そうでない場合に比べてディスカウントが発生する可能性がある。一方、生活必需品の買い出しに農村部へ出向いた買い手は、限られた時間的制約の中で売り手の言い値で財を購入せざるを得ない度合いがより大きく、逆に高値での購入を強いられる可能性もある。このように、取引の実勢価格を算定するにあつ

¹⁰ ヘドニック・アプローチについては、白塚(1994)、63-67 頁。

ては、財の物理的な性質にとどまらず、取引価格に影響を与え得る取引の性質をも調整する必要がある。とりわけ戦時には、情報統制が強化されていたほか、交通、通信手段の寸断等もあり、財の価格に関する情報の伝達は平時以上に困難であったと考えられる。このように市場の分断が顕著な状況下、上記のような取引属性に基づくバイアスは平時以上に顕著であった可能性がある¹¹。

また、戦後の闇市のように、取引当事者の間で価格が事実上公示されており、買い手が他の潜在的な売り手の提示価格と比較したうえで取引を行う場合には、各財の価格は競争によりある程度収斂に向かうと考えられる¹²。これに対して戦時中に隠れて行われていた闇取引では、売り手と買い手の間の情報の非対称性、ならびに財の空間的移動に関する制約がより大きかったと考えられ、取引の当事者や場所による変動が平時より大きくなる可能性がある。したがって、上記のような取引の性質を反映した品質調整を実施する必要性は、平時よりさらに大きいと考えられる。

3. 使用するデータの詳細とヘドニック・アプローチによる闇価格の推計方法

(1) 使用するデータの詳細

原資料である中村・溝口(1994)には、日本銀行が作成した戦後の闇物価統計に含まれる品目のうち、21品目 549件の個別取引について協力会議調査に基づく価格や取引形態の記載がある。本稿では、このうち50件以上の取引が記載され、かつ戦後の闇価格と接続可能なデータが存在する5品目（米、甘藷、馬鈴薯、鶏卵、砂糖）を選び、闇価格を推計することとした。なお、これら5品目については、ヘドニック・アプローチによる推計で一定の自由度（最低でも40）が得られる（表1）。

データが存在する月は、1943年10月、11月、12月、1944年1月、2月、3月、7月、8月、9月、1945年6月の10か月である。各品目、各月のデータ数にはばらつきがあり、最高33（1944年9月の甘藷）、最低1（1944年1月と7月の甘藷、1943年12月～1944年3月の馬鈴薯、1944年1月の砂糖）となっている。なお、甘藷については1945年6月のデータは存在しない。本稿では、各月のデータを四半期ごとにまとめ、1943年第4四半期（10月～12月）、1944

¹¹ このほか、戦況悪化に伴う原材料などの生産に必要な資材の供給制約によって、財の品質自体が物理的に劣化していた可能性もある。しかしながら、本稿の分析に用いた資料では、個々の取引において授受された財の物理的な品質についての記述はほとんどなく、品目が示されているに過ぎない。資料上の制約から、財の物理的な品質について十分な調整を行うことが難しかった点には留意が必要である。

¹² 戦後の闇物価統計のように店頭表示価格を指標として採用した場合、店頭での交渉によって実際の取引価格が店頭表示価格と乖離する可能性がある。本稿で使用したデータは実際の取引価格であり、そうした問題は発生しない。

年第1四半期（1月～3月）、1944年第3四半期（7月～9月）、1945年第2四半期（4月～6月）の4期分の価格データを作成する。なお、1945年第2四半期のデータは6月分のみである（表2）。

（2）ヘドニック・アプローチによる闇価格の推計方法

統計が開始された1943年第4四半期を基準時点とし、個別品目ごとに1944年第1四半期以降の四半期ダミーの係数を計測する。その際、コントロール変数として、売り手ダミー、買い手ダミー、取引場所ダミー、原統計種別ダミー、取引単位対数値を用いて推計を行う。具体的には、売り手ダミーについては、生産者が売り手である場合を基準として、ブローカー、小売商、知人のそれぞれについてダミー変数を設定する¹³。買い手ダミーについては、消費者が買い手である場合を基準として、農家、ブローカー、小売商のそれぞれについてダミー変数を設定する。取引場所ダミーについては、消費地における取引を基準として、消費地以外での取引についてダミー変数を設定する。原統計種別ダミーについては、事務局集計分を基準として、婦人団体調査依頼分についてダミー変数を設定する。取引単位は、米について1升単位、甘藷、馬鈴薯、砂糖について1貫単位、鶏卵について1個単位の取引を基準として、原資料に記載された取引1回ごとの取引数量の対数値を取る。そして、四半期ダミーの係数を、取引属性等を調整した後の1943年第4四半期からの価格変動とみなして、以下の推計式により各月の価格を算出する¹⁴。

¹³ 闇価格の推計において、生産者が売り手である場合を基準とするのは、戦局が悪化するにつれて、都市部の小売商の店頭では生活必需品の不足が顕著となり、都市住民の多くが生産者から直接購入する事例が一般化していたとの認識に基づく。消費者の購入のうち生産者からの直接購入がどの程度の比率に上っていたかを正確に知ることは困難であるが、これを裏付ける記述や証言は多数存在する。例えば、戦後間もなく執筆された犯罪面からみた敗戦の原因に関する研究によれば、「消費者の闇値による買出行為は常識として一般に是認せられ、大都市の市民は闇に依るに非ざれば生活継続を不能とされるに至り…」（菊池1947）とされる。また、1943年10月中の取り締まりを通じて推定された埼玉県南部における買出し人数は1日あたり1500～3000人に上ったとされる（浦和地方裁判所検事局1943）。一般人の証言を集めた『戦争中の暮しの記録』でも、米の配給は1ヵ月に5、6日分に過ぎず、配給品の不足を補うために農家に出しに行くのが日課となっていたとの証言がある。

¹⁴ 被説明変数の価格、および説明変数のうち取引単位を対象にBox-Cox変換における関数形の尤度比検定を実施したところ、5品目すべてについて、線形は1%有意水準で棄却された。両対数線形については、甘藷、馬鈴薯については5%有意水準で棄却されず、米、鶏卵については5%有意水準では棄却されるが、1%有意水準では棄却されず、砂糖については、1%有意水準で棄却された。被説明変数の価格のみを対数変換し、説明変数の取引単位を線形にした半対数線形は、米、甘藷、馬鈴薯、砂糖について5%有意水準で棄却されず、鶏卵については1%有意水準で棄却された。

$$\ln P_t = \alpha + \sum_{t=1}^T \beta_t \cdot D_t + \sum_{j=1}^n \gamma_j \cdot C_j + \varepsilon_{t,j}$$

α : 基準価格（1943 年第 4 四半期時点）

D_t : 四半期ダミー（ヘドニック・アプローチに基づく価格変動）

C_j : 取引の性質に関するコントロール変数（取引属性ダミー、取引単位の対数値）

4. 主な推計結果

（1）コントロール変数の係数と有意性

第 3 節のデータならびに推計方法に基づいて行ったヘドニック推計の結果は表 3 のとおりである。推計結果全体として、係数は総じて有意であり、決定係数（自由度調整済み）は 0.838（鶏卵）～0.616（馬鈴薯）と高いことから、取引の属性に起因する変動は適切にコントロールされていると判断される。

続いて、各ダミー変数の係数をもとに、取引当事者の属性や取引場所などの違いが闇価格に与える影響をみていきたい。その際、被説明変数である闇価格は対数変換されているので、表 3 の上段で取引属性を示すダミー変数の係数を真数変換すれば、闇価格に与える影響を基準となる価格に対する比率で示すことができる。同表の下段では、係数が有意なダミー変数について、真数変換した比率から導かれる変化率を示してある。

まず、売り手の違いが価格に与える影響をみる。売り手が生産者である場合を基準とすると、売り手がブローカーである場合には、売り手が生産者である場合（以下同じ）に比べ、甘藷の価格が 2.5 倍へと有意に上昇する¹⁵。米、馬鈴薯、鶏卵、砂糖の価格への影響は統計的に有意ではない。売り手が小売商である場合には、鶏卵の価格は 1.9 倍へと有意に上昇する一方、甘藷の価格は 0.3 倍へと有意に下落する。米、馬鈴薯、砂糖の価格への影響は統計的に有意ではない。売り手が知人である場合には、米の価格は 0.5 倍へと有意に下落する一方、甘藷の価格は 3.5 倍へと有意に上昇する。なお、馬鈴薯、鶏卵、砂糖の価格への影響は統計的に有意ではない。

次に、買い手の違いが価格に与える影響をみてみよう。買い手が消費者である場合を基準とすると、買い手が小売商である場合には、買い手が消費者である場合に比べ、米の価格は 0.6 倍へと有意に下落する。他の財の価格への影響は統計的に有意ではない。

取引場所の違いが価格に与える影響についてみると、取引場所が消費地以外の場合、米、馬鈴薯の価格はいずれも 0.7 倍へと有意に下落する。甘藷、鶏卵、

¹⁵ 計算式は $\exp(0.918)=2.504$ となる。

砂糖の価格への影響は統計的に有意ではない。

婦人団体への価格調査依頼分の計数は、事務局の直接調査分に比べ、甘藷については価格が 1.3 倍へと有意に上昇する。米、馬鈴薯、鶏卵、砂糖の価格への影響は統計的に有意ではない。

取引単位の価格に対する弾性値をみると、取引単位が 1%大きくなると、米、甘藷については価格がそれぞれ+1.1%だけ有意に上昇する。馬鈴薯、砂糖、鶏卵については統計的に有意ではない¹⁶。

（２）闇価格の推移

今回の闇価格の推計に当たっては、単位当たりの価格水準を導出しており、単位当たりの価格水準が公表されている日本銀行調べの戦前から戦後にかけての小売価格（統制が実施されている間は統制価格）、および戦後の闇価格のデータとの接続が可能である。今回導出したヘドニック推計に基づく 5 品目の価格を、1946 年 9 月以降の日本銀行調の闇価格データに接続した結果は、表 4 および図 1～5 のとおりである。いずれも 1934 年中の平均価格を 1 とする指数で表してある。これをみると、闇価格は大战中から上昇が加速し、大战末期である 1945 年第 2 四半期（甘藷については同年 9 月）にかけて上昇率は前期比換算で +40%から+80%に達している。もっとも、品目によって上昇時期にばらつきがあり、米、砂糖は大战中、甘藷、馬鈴薯、鶏卵は終戦直後に上昇率のピークを迎えている。また、1934 年時点の価格との水準比較では、終戦前後にはすでに甘藷の 57 倍（1945 年 9 月）～砂糖の 744 倍（1945 年 6 月）にまで上昇していたことが示される。

農村部の闇価格との比較では、都市部の方が概ね高めとなっており、主として流通機能の低下に起因する都市部への物資流入の欠乏から闇価格の高騰が加速していったとの関係者の証言と整合的である。なかでも、農村部との乖離がとくに大きいのは砂糖であり、1945 年 6 月時点で都市部の闇価格は農村部の 14.3 倍に達した。このほか、米が 3.8 倍、馬鈴薯が 2.3 倍、鶏卵が 1.7 倍（いずれも 1945 年 6 月時点）、甘藷が 1.5 倍（1945 年 9 月時点）となっている。もっとも、1944 年中については、馬鈴薯の闇価格は農村部の方が高くなっており、甘藷は都市部と農村部とでほとんど差がない（図 1～5）。図 1～5 では、四半期ダミーの標準偏差に基づく都市部の闇物価の推計値の 95%信頼区間を示してある。これをみると、米と砂糖は 1943 年第 4 四半期から一貫して農村部の闇物価に比べて有意に高い値となっている。一方、馬鈴薯、甘藷、鶏卵については、

¹⁶ 取引単位が大きくなると価格が上昇するという結果は、平時の取引における大量販売に伴う値引きの慣行とは整合的でないが、戦時中において闇取引が発覚するリスクの増大を反映している可能性も考えられる。

1944年第3四半期まで都市部と農村部の闇物価との差は有意ではなく、馬鈴薯と鶏卵は1945年第2四半期に至って都市部が農村部に比べて有意に高い値となる。なお、甘藷については1945年第2四半期のデータが存在しない。

以下では、品目別に戦中・戦後を通じた闇価格の趨勢をみていく。

米は、1943年第4四半期には1934年の14.0倍の水準で取引されていた。1944年第3四半期までは+38%（前期比換算、以下同様）、1945年第2四半期までは+49%と上昇率が加速し、1945年9月までは+33%、1946年2月までは+20%、価格がピークを迎える1948年7月までの間は同+16%へとペースダウンした。ピーク時の闇価格は1943年の924倍の水準であった。

甘藷は、1943年第4四半期には1934年の4.7倍の水準で取引されていた。1944年第3四半期までは+31%、1945年9月までは+52%、1946年2月までは+69%と上昇率が加速した。その後、ピークを迎える1948年7月までの間は+16%へとペースダウンした。ピーク時の闇価格は1934年の567倍の水準であった。

馬鈴薯は、1943年第4四半期には1934年の9.3倍の水準で取引されていた。その後、1944年第3四半期までは+3%と比較的安定していたが、その後、1945年第2四半期までは+84%と上昇率が加速し、1945年9月までは同+7%へといったんペースダウンするが、1946年2月までは+133%へと加速した。その後、ピークを迎える1948年6月までは+12%へとペースダウンした。ピーク時の闇価格は1934年の818倍の水準であった。

鶏卵は、1943年第4四半期には1934年の10.0倍の水準で取引されていた。その後、1944年第3四半期までは+47%、1945年第2四半期までは+41%のペースで上昇を続けた。その後、1945年9月までは同+9%へといったんペースダウンするが、1946年2月までは+55%へと加速し、その後、ピークを迎える1948年11月までの間は+16%へとペースダウンした。ピーク時の闇価格は1934年の824倍の水準であった。

砂糖は、1943年第4四半期には1934年の33.0倍の水準で取引されていた。その後、1944年第3四半期までは+80%、1945年第2四半期までは+57%のペースで上昇を続けた。1945年9月までは-16%といったん下落し、1946年2月までは+20%と再び上昇し、その後、ピークを迎える1947年10月までは+13%の上昇となった。ピーク時の闇価格は1934年の2,717倍の水準であった¹⁷。

¹⁷ 砂糖については、戦前、戦中を通じて「白砂糖」のデータを採用しているが、1945年7月～12月までのデータは存在せず、1946年1月～1950年9月まで品質の劣る「赤ザラメ」、1948年5月以降は「白砂糖」のデータが存在する。そこで、「赤ザラメ」と「白砂糖」の両方の価格が得られる1948年5月～1949年9月のデータを利用してヘドニック・アプローチを用いた価格調整を行い、「白砂糖」の価格を推計した。具体的には、各月の白砂糖の価格を P_w 、赤ザラメの価格を P_r とすると、 $P_{w,t}=241.74+1.158P_{r,t}+e_t$ を得る。

5. 若干の考察

本節では、闇価格についての本稿の推計とあわせて先行研究や同時代の文献資料を参照しつつ、大戦中の闇取引の実態について、若干の考察を行う。

戦時期日本では、日中戦争開始後の 1937 年 11 月から実施された綿花および綿糸に対する自主的最高標準価格の設定を皮切りに、さまざまな商品について価格統制が導入されることとなった¹⁸。1939 年 10 月には、ドイツのポーランド侵攻（同年 9 月）を受けて、前年に制定されていた国家総動員法に基づき価格等統制令が公布、施行され、すべての財の公定価格は原則として同年 9 月 18 日の前日の水準に凍結されることとされた¹⁹。各品目の闇取引が広範に行なわれるようになったのは、すべての財について価格統制が実施されるようになった価格統制令の施行後であると考えられる。

協力会議の事務局が 1940 年頃に作成した『物価統制協力会議について』というパンフレットの冒頭には、以下のようにこの時点ですでに闇取引が発生していたことが記されている²⁰。

事変以来既に 3 ヶ年、皇軍の威力は大陸の至る所に発揮されているが、日本としての最も大きな悩みは悪性インフレーションの脅威である。事変以来、大量に財貨が消費されて供給が不足となり、国民の生活は益々ひっ迫せざるを得なくなった。殊に欧州動乱の勃発に依って国際物価の水準が上昇し始めてから、我国物価騰貴の趨勢も益々顕著となって来た。此の経済的の難関を切り抜ける為に、政府は種々な機関を設けて其時々に応ずる政策を実施して来たのであるが、物価騰貴の趨勢はあらゆる政策を乗り越えて益々其の暴威を逞しうする様に見える。此傾向を予測して昨年の秋物価停止令が發布され、全面的に其の騰貴の趨勢を抑制しようと試みたのである。然し乍ら物価は単なる権力のみをもって之を喰ひ止めることが出来るものではない。営業者側に於てその必要を了解し、之を固守しようとする意図に燃え、又其の需給の調整が之に伴はなければ其の実現は到底不可能である。

事変以来政府の物価政策に対する努力は実に著しいものがあつた。然るに其の効果が必ずしも顕著でなかったことの大きな理由は官民の協力が不足していたことにある。……単に上から統制されると云ふ印象が強かつたが為

¹⁸ 大蔵省昭和財政史編集室(1956)、239-277 頁。

¹⁹ 本稿に掲載する 5 品目の統制価格が最初に官報に公示された時期をみると、砂糖が 1939 年 5 月、米と鶏卵が 1939 年 10 月、甘藷と馬鈴薯が 1940 年 9 月となっている。

²⁰ 中央物価統制協力会議事務局（作成年不明）1-2 頁。本資料には日付がなく作成年は不明ながら、「昨年の秋物価停止令が發布され」という文面から 1940 年に作成されたものと推測される。

に、動もすれば当業者は之を如何にして潜って行かうかに心を砕いた。配給が不円滑となった為に、消費者達は高値を払っても買急ぎ、闇取引が種々な形で横行しているのである。一部の物資が価格統制の対象となっている間は法律と経済警察を以て其の実現を図ることが出来るであらうが、今日の如く其の対象が全面的に拡大し、国民生活の凡ゆる部面に亘っては、当業者は勿論国民一般がこの価格統制に協力するの でなければ到底其の実現を期する事は出来ない。

資料上の制約もあり闇価格の上昇が加速した時期を厳密に特定することは困難であるが、『昭和財政史』には、野菜、酒、味噌、醤油、石けん、練炭、木炭などについて、1942 年中の闇取引の実態を伝える記事が引用されている²¹。このほか『昭和財政史』には、協力会議が 1942 年 12 月から 1943 年 5 月にかけて、月央における農林水産物の購入価格を全国 2 千世帯弱の消費者の自己申告に基づいて調査した「生活必需物資配給実態調査」の概要が紹介されている。この調査は、本稿で使用した協力会議調査とは別物であり、協力会議調査に先立って行われたものである。この「生活必需物資配給実態調査」によれば、1942 年 12 月、申告者は 100 回のうち 36 回は公定価格より高値で商品を購入しており、平均すると公定価格の+22%の金額を支払っていることが報告されている。こうした記述資料からは、1942 年中には闇価格が上昇しつつあったことが窺われる²²。

その後、1943 年から 1944 年にかけて戦局悪化に伴い物資欠乏が激しくなり、闇取引が広範化したことが記述資料から知られている。これに対して政府は、1943 年 4 月に「緊急物価対策要綱」を決定、発表して物価対策の刷新を図ったが、必ずしも実を挙げることはできなかったとされる。『昭和財政史』では、この時期の闇取引について、以下のように要約している²³。

²¹ 大蔵省昭和財政史編集室(1956)、304-307 頁。

²² 大蔵省昭和財政史編集室(1956)、307-309 頁。なお、同調査の実施は当初 1 年間の予定とされたが、計数は 1943 年 5 月までしか記載されていない。また、同調査によれば、1943 年 5 月には、公定価格より高値での購入の割合は 100 回中 30 回、平均支払金額は公定価格の+14%へと低下している。一方、本稿で使用した協力会議調査のデータは同年 10 月からとなっている。同調査と、本稿でデータを使用した協力会議調査との関係は明らかではないが、当初 1 年間の予定で始められた調査が何らかの要因で中断した後、改めて 10 月から別のかたちで再開されたのかもしれない。この点について、中村・溝口(1994)の「解題」は、「当時の社会的風潮から闇物資購入を報告することへのためらいもあったと想像される」として、「生活必需物資配給実態調査」における購入価格が過小申告となっている可能性を指摘している。

²³ 大蔵省昭和財政史編集室(1956)、355-356 頁。

国民の主食たる米麦の集荷は、価格の引上げや補給金の交付にもかかわらずようやく困難となって、農村には米麦があっても、都市ではいわゆる代用食の配給が多くなった。副食物の集荷配給はさらにひどく、都市に住む者は次第に政府関係の配給機構に期待をかけ得ないようになった。……国民ばかりでなく、政府自身も直接に市場価格、いわゆる闇価格を支払うのでなければ必要な商品を手に入れ得ない状態となり、兵器やその原料、部品とくに緊急を要するものに対しては、闇価格を支払うようになった。当初「闇」の中で行われていたこのような状態は、アメリカ空軍の空襲が激化するにつれて漸次表面化し、20年8月の降伏とともにほとんどそのまま表面に現われることとなったのである。

以下は、この間の経緯に関する統制団体（全国農業会）の資料からの抜粋である²⁴。

本質的には公定価格の決定が国民生活及重要産業の基礎物資より市価を標準として順次事務的に決定せられたる結果として、重要物資が不急品に比し割安の状態を呈し、公定価格の整備と共に実行不能の結果となり、チケットの交付のみで現品は容易に入手出来ず、業者と消費者の間に次第に闇価格が形成せられ、昭和18年上半期に入るに及び、企業整備令に依る半失業者が闇商人として、各地に現れ自由取引が行はれたが、政府は其事態を認識せず数次に亘る公定価格の改訂に依り統制を強化した為農産物は産地に滞貨し農業用資材も、生活用資材も殆んど配給皆無の状態になった。物資の偏在、需給の攪乱、売惜み、買占め、抱合販売、等が横行し、商人は初期に於ける量目違反から、価格違反が一般化することとなった。

上記の記述資料からは、全般的な価格統制が実施された1939年以降に各種の商品に対する闇価格が形成されるようになり、1942年頃には公定価格との乖離が拡大し、1943年に入ると戦局の悪化等から乖離がさらに拡大していったことが窺われ、本稿における推計結果と概ね整合的である。

6. おわりに

本稿では、第二次世界大戦中ならびに同戦後の財価格の変動を継続的に捉えるための試みとして、いくつかの財について、既存の戦後闇価格データに接続可能な戦時中の闇価格に関する時系列データを新たに作成した。その結果、闇価格は大战中から上昇が加速し、大战末期には各品目とも四半期ベースの前期

²⁴ 全国農業会調査部(1948)、3頁。

比換算で+40%から+80%に達しており、1934年との比較では、終戦前後にはすでに 50 倍（甘藷）～800 倍（砂糖）以上にまで上昇していたことが示された。もともと、品目によって上昇時期にばらつきがあり、米、砂糖は大戦中、甘藷、馬鈴薯、鶏卵は終戦直後に月間上昇率のピークを迎えている。また、農村部の闇価格との比較では、都市部の方が概ね高めとなっており、主として流通機能の低下に起因する都市部への物資流入の欠乏から闇価格の高騰が加速していったとの関係者の証言と整合的である。

参考文献

（一次資料）

日本銀行統計局「消費財闇及自由物価相場帳（東京）」日本銀行アーカイブ、検索番号 11524

中央物価統制協力会議事務局「物価統制協力会議について」国立公文書館所蔵資料『昭和財政史資料 第 9 号 金融 物価（1）』請求番号：平 2 2 財務 02571100、作成年不明

中村隆英・溝口敏行編『第二次大戦下生活資材闇物価集計表：中央物価統制協力会議調査・関成一氏作成保存資料』一橋大学経済研究所日本経済統計情報センター、1994 年

（著書・論文）

大蔵省昭和財政史編集室『昭和財政史』第 9 巻 通貨・物価、東京経済新報社、1956 年

伊藤正直「戦後ハイパー・インフレと中央銀行」『金融研究』第 31 巻第 1 号、2012 年 1 月、181-226 頁

浦和地方裁判所検事局「埼玉県下に於ける最近の所謂買出部隊に対する取締状況及諸類の供出状況報告」1943 年 12 月、『資料日本現代史』13、大月書店、1985 年

加瀬和俊「太平洋戦争期食糧統制政策の一側面——食糧生産＝供給者の行動原理と戦時的商品経済——」原 朗編『日本の戦時経済：計画と市場』東京大学出版会、1995 年、283-313 頁

菊池健一郎「司法の面より観たる敗戦原因の研究」『司法研究』報告書第 34 輯 5、司法省調査課、1947 年

暮しの手帖編集部『戦争中の暮しの記録』（保存版）、暮しの手帖社、1969 年

小池良司「1940 年代の家計消費の補間」未定稿、2018 年

白塚重典「物価指数に与える品質変化の影響——ヘドニック・アプローチの適用による品質調整済みパソコン物価指数の推計——」『金融研究』第 13 巻

- 第4号、1994年、61-95頁
- 新保 博『近世の物価と経済発展：前工業化社会への数量的接近』東洋経済新報社、1978年
- 全国農業会調査部「農村闇価格に関する調査：昭和18年7月—昭和22年12月」『全国農業会調査資料』第18輯、1948年
- 東洋経済新報社『戦前戦後物価総覧』1954年
- 西田美昭「戦時・戦後闇経済の実相」『経済月報 解題・総目次』不二出版、2002年、5-26頁
- 日本銀行統計局『本邦経済統計』、各年版
- 日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行百年史』資料編、1986年
- 初田香成『都市の戦後 雑踏のなかの都市計画と建築』東京大学出版会、2011年
- 原 朗「日本の戦時経済——国際比較の視点から——」原 朗編『日本の戦時経済：計画と市場』東京大学出版会、1995年、3-43頁
- 森田優三「戦時の物価」森田優三編『日本経済の分析 2 物価』春秋社、1963年、81-116頁
- 山崎志郎『戦時経済総動員体制の研究』日本経済評論社、2011年
- 山崎志郎『太平洋戦争期の物資動員計画』日本経済評論社、2016年
- Pollak, Robert A., *The Theory of the Cost-of-Living Index*, Oxford University Press, 1989.
- The United States Strategic Bombing Survey (USSBS), *The Effects of Strategic Bombing on Japan's War Economy*, December 1946. (邦訳：アメリカ合衆国戦略爆撃調査団『日本戦争経済の崩壊——戦略爆撃の日本戦争経済に及ぼせる諸効果——』正木千冬訳、日本評論社、1950年)

表 1 闇価格の推計に使用した品目

使用品目	標本数	四半期数	生産者と 消費者	売り手・買い手ダミー付標本数						その他のダミー付標本数		自由度
				売り手			買い手			消費地以外 での取引	婦人団体 調査依頼分	
				ブローカー	小売商	知人	農家	ブローカー	小売商			
米	74	4	33	25	3	10	1		2	40	12	62
甘藷	88	3	69	7	3	2	3		4	77	24	77
馬鈴薯	69	4	54	12	2	1				48	7	59
鶏卵	51	4	31	16	1	2		1		28	8	40
砂糖	52	4	14	35	1	2				2	12	42

表 2 月別標本数

月	米	甘藷	馬鈴薯	鶏卵	砂糖	計
1943年10月	8	16	8	13	10	55
1943年11月	11	23	10	12	13	69
1943年12月	7	5	1	2	3	18
1943年4Q	26	44	19	27	26	142
1944年1月	2	1	1	3	1	8
1944年2月	4	4	1	2	3	14
1944年3月	6	3	1	5	3	18
1944年1Q	12	8	3	10	7	40
1944年7月	11	1	17	2	4	35
1944年8月	12	2	18	5	3	40
1944年9月	7	33	4	3	9	56
1944年3Q	30	36	39	10	16	131
1945年6月	6	0	8	4	3	21
計	74	88	69	51	52	334

表3 ヘドニック推計結果（コントロール変数の係数）

	米	甘藷	馬鈴薯	鶏卵	砂糖
	標準誤差	標準誤差	標準誤差	標準誤差	標準誤差
定数項 1943年4Q	1.445 0.17 ***	0.335 0.21	0.515 0.20 **	-1.236 0.10 ***	3.858 0.13 ***
ダミー変数 1944年1Q	0.064 0.16	0.195 0.19	0.194 0.35	0.476 0.17 ***	0.573 0.41
3Q	0.970 0.18 ***	0.801 0.12 ***	1.021 0.20 ***	1.151 0.14 ***	1.759 0.13 ***
1945年2Q	2.174 0.19 ***	- -	1.929 0.20 ***	2.179 0.17 ***	3.118 0.09 ***
ダミー変数 売り手 7ローカー	-0.082 0.14	0.918 0.20 ***	0.263 0.21	-0.089 0.10	-0.149 0.22
小売商	-0.361 0.25	-1.193 0.09 ***	-0.060 0.26	0.639 0.10 ***	-0.389 0.23
知人	-0.735 0.36 **	1.263 0.18 ***	-0.048 0.11	-0.048 0.21	-0.208 0.18
買い手 農家	0.058 0.20	- -	- -	- -	- -
7ローカー	- -	- -	- -	-0.024 0.07	- -
小売商	-0.552 0.21 **	- -	- -	- -	- -
場所 消費地以外	-0.399 0.14 ***	0.115 0.19	-0.389 0.13 ***	-0.125 0.11	0.105 0.40
婦人団体調査依頼分	0.079 0.18	0.251 0.11 **	0.027 0.19	0.146 0.14	-0.068 0.24
取引単位（対数値）	0.116 0.04 ***	0.110 0.05 **	-0.015 0.18	-0.014 0.08	-0.028 0.07
自由度調整済み決定係数	0.643	0.619	0.616	0.838	0.819

（注） *印は不均一分散を仮定した有意性検定結果。***：1%水準で有意、**：5%水準で有意、*：10%水準で有意。

ダミー変数の係数から算出した取引属性による価格変動（統計的に有意なもの）

	米	甘藷	馬鈴薯	鶏卵	砂糖
1943年4Qの価格	4.242 円/升	1.398 円/貫	1.674 円/貫	0.291 円/個	47.371 円/貫
取引属性による価格変動（%）					
売り手 7ローカー	-	150.4	-	-	-
小売商	-	-69.7	-	89.5	-
知人	-52.0	253.6	-	-	-
買い手 農家	-	-	-	-	-
7ローカー	-	-	-	-	-
小売商	-42.4	-	-	-	-
場所 消費地以外	-32.9	-	-32.2	-	-
婦人団体調査依頼分	-	28.5	-	-	-
取引単位（弾性値）	1.123	1.116	-	-	-

表 4 品目別闇価格指数（1934 年平均小売価格=1）

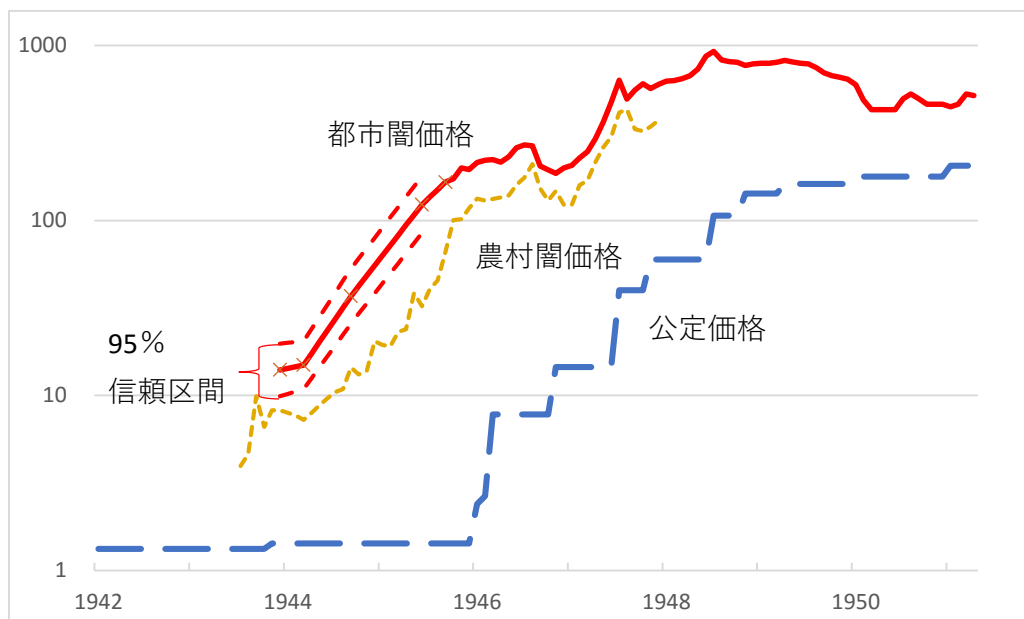
	米	甘藷	馬鈴薯	鶏卵	砂糖
1943年4Q	13.994	4.725	9.341	10.001	32.953
1944年1Q	14.919	5.743	11.341	16.098	58.445
3Q	36.915	10.527	25.931	31.617	191.348
1945年2Q	123.053	-	64.292	88.385	744.784
1945年9月	163.394	56.871	68.874	96.727	1297.489
1946年2月	221.132	136.124	282.195	200.682	1221.883
ピーク（ピーク月）	923.719（1948年7月）	566.772（1948年7月）	817.953（1948年6月）	824.070（1948年11月）	3905.420（1947年10月）

価格変化率（四半期換算）

	米	甘藷	馬鈴薯	鶏卵	砂糖
1943年4Q～1944年3Q	38.2	30.6	40.5	46.8	79.7
～1945年2Q	49.4	n.a.	35.3	40.9	57.3
～1945年9月	32.8	52.5（1944年2Q～）	7.1	9.4	74.2
～1946年2月	19.9	68.8	133.1	54.9	-3.5
～ピーク	15.9	15.9	11.6	15.7	12.8

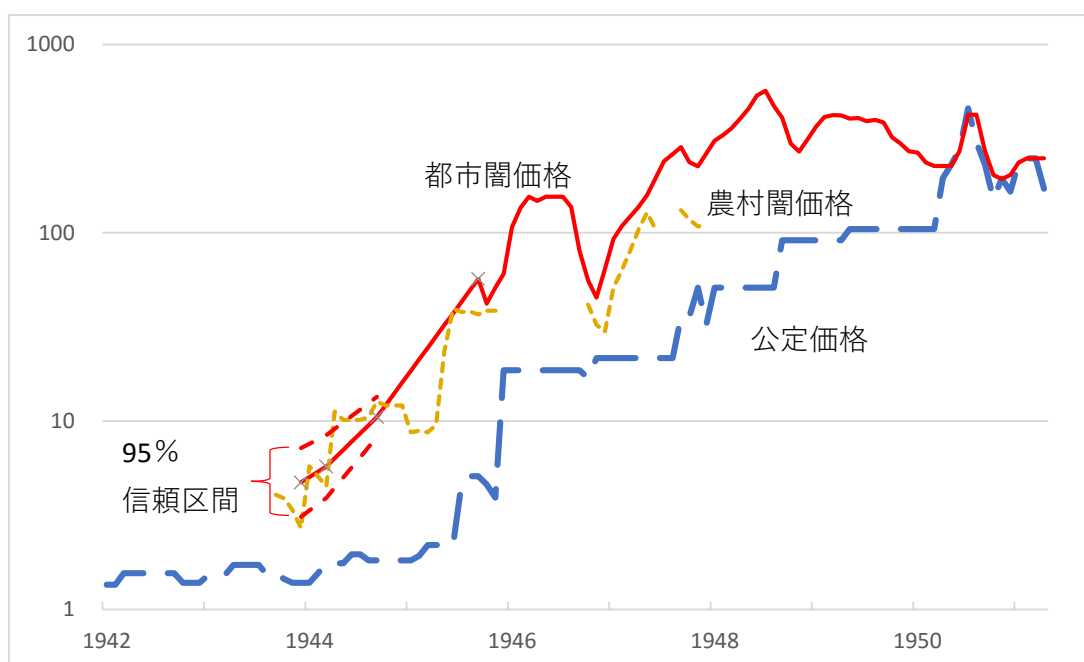
（参考） 1934年中の平均価格	0.303 円/升	0.296 円/貫	0.179 円/貫	0.0291 円/個	1.438 円/貫
------------------	-----------	-----------	-----------	------------	-----------

図 1 米価格（1934 年平均=1）



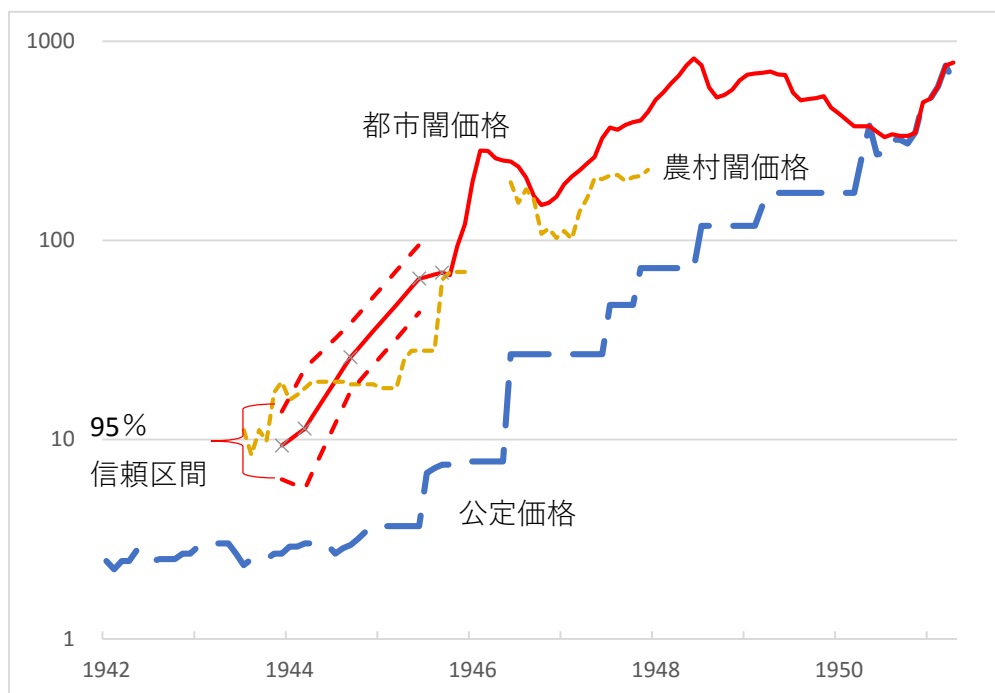
資料：全国農業会調査部(1948)、東洋経済新報社(1954)、中村・溝口(1994)。

図 2 甘藷価格（1934 年平均=1）



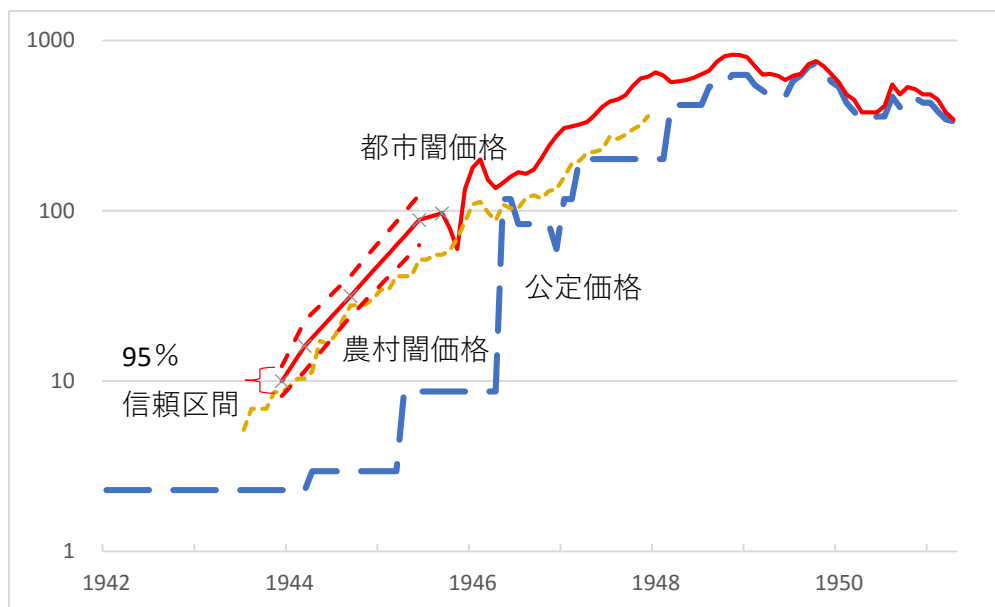
資料：全国農業会調査部(1948)、東洋経済新報社(1954)、中村・溝口(1994)。

図 3 馬鈴薯価格（1934 年平均=1）



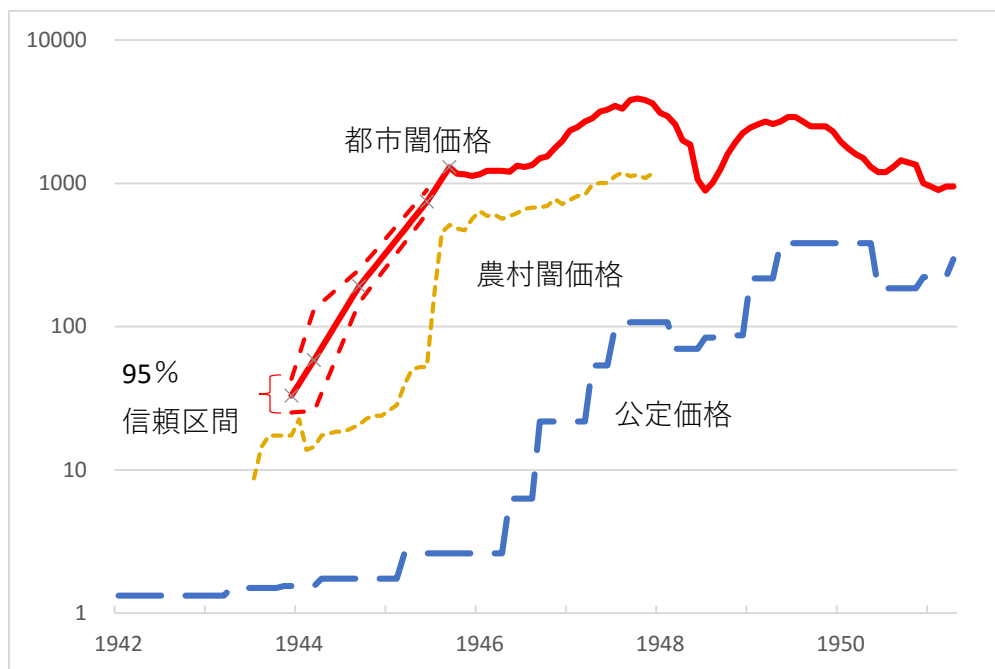
資料：全国農業会調査部(1948)、東洋経済新報社(1954)、中村・溝口(1994)。

図 4 鶏卵価格（1934 年平均=1）



資料：全国農業会調査部(1948)、東洋経済新報社(1954)、中村・溝口(1994)。

図 5 砂糖価格（1934 年平均=1）



資料：全国農業会調査部(1948)、東洋経済新報社(1954)、中村・溝口(1994)。